

2014年10月20日

大学院地域社会研究科  
准教授 平井太郎



今回の定期便は、第1回となる野田村ボランティアまつりの企画にあわせ、通常の第3土曜日ではなく日曜日に日程を変更して運行された。さらに、ボランティアまつりが10時から14時まで開催されることになっていたため、6時30分出発、18時帰着（発着時間は大学正門でのもの）で運行された。また、21世紀教育科目「東日本大震災復興論」受講者の参加が義務づけられており、教員1名、学生32名、市11名の計44名となる比較的大規模な定期便となった。

出発後、予定より30分遅れの9時45分に到着し、速やかに会場設営等の準備にとりかかった。準備に際しては、以下のように運行当日に弘前市ボランティアセンターから協力依頼が寄せられたこと、野田村ボランティアまつり自体の企画が流動的であることを鑑みて、臨機応変の対応ができるように往路の車内で申合せた。弘前市ボランティアセンターからの依頼とは、市民の赤石さんから提供された林檎（レッドゴールド3箱）と駄菓子（数箱）の無料配布など弘前市民のよるブースの運営にかんするものであった。



野田村ボランティアまつりの他のブースにかんしては、商工会女性部・青年部をはじめ予定よりも設置数が少なくなっていたせい、来場者もその時点での滞在者数が常時数十名程度とやや閑散としたものであった。そうしたなかでも参加学生は状況を見ながら対応を重ね来場者とのコミュニケーションも着実に進めていた。第1に、社会福祉協議会とそのボランティアで運営予定であった綿飴やポップコーンの販売を一手に担ったほか、社協と青森県立保健大学学生（2名）が運営予定であったフラフープイベントにも積極的に協力した。第2に、閑散とした広場の雰囲気盛り上げ子どもたちと交流すべく、持参していたドッジビーセットを広場に設置し企画のないイベントを実施した。

12時を過ぎると会場はさらに閑散となったため、12時30分以降、学生全員と市民の希望者を募り、約20名ずつ2班に分かれて復興事業予定地を見学するフィールドトリップを行なった。引率は学生事務局の2名が交代で行い平井も適宜コメントを付した。愛宕神社の鳥居が今年8月に塗り直されるなど津波被災の痕跡は日毎に薄れていたが、たまたま休工日に当たっていたため波打ち際まで足を運び、広々としていた松林の喪失感、海面から10-15mはあろうかという防潮堤のスケールアウト感、海岸から振り返り愛宕神社鳥居までの荒涼感を学生も実感できたと思われる。

13時にフィールドトリップ第1班が戻ると、予定を繰り上げて野田村ボランティアまつりが終了しており、第1班が片付けに従事しつつ、第2班は予定どおりフィールドトリップに出かけた後、13時40分に合流、14時過ぎまで社協の方の指示にしたがってテントの撤去なども行った。その後、道の駅などで30分以上の長めの休憩時間をとったうえで、車内で全員の感想を聞きながら帰途につき、18時過ぎに正門に到着した。



感想では、学生事務局から感想を述べ合うことの意義の説明や、今回のような屋外での遊び場では通常の屋内とは子どもの表情が異なることなどの解説が行われたあと、参加学生からは「今まで映像の世界でしかなかった被災地に初めて足を運んだ今日のこの日を忘れない」「野田村の方の笑顔に接することができ充実した」「着実に復興していることを実感できた」といった声が多く寄せられた。

これに対し市民の方からは「ボランティアまつりの内容としてバーベキューを提案していたが実現されておらず残念である」との声が聞かれた。

これらを受け私からは、第1に物品提供をはじめとする市民の方への謝意、第2に市民によって学生が導かれ活躍できたことに対する謝意、第3に市民の方から提案をいただいたことへの謝意と実現できなかったこと、それを事前にお伝えしていなかったことに対するお詫びを申し上げたうえで、市民の方・学生の双方に対し、第1に今後も新たな提案を積極的に行っていただきたいこと、第2に、なぜなら、今回のようなイベントに出ることができないような被災者こそが心のケアをはじめとする支援を待っており、それらの方にアクセスするための方法に知恵を絞っていただきたいこととお話した。

今回の定期便は、イベントへの参加であり、しかも野田村の方たちによる全体企画やブース企画運営を直接応援できるタイプの参加ではなかった。これに対し21世紀教育科目受講生など初めて参加して今回が今後の活動の起点ないしモデルとなる可能性がある学生が大部分を占めていた。その意味では、野田村では本質的にはこういった課題があり、ボランティアは何が求められ、何ができるのかといった全体的な理解のうえで、今回の定期便を位置づけることが通常以上に求められていたと考えられる。

この点、今回は偶然にして、弘前市民のブースや社協のブース・イベントの運営に当日



関わることができたために、学生も感じるところが少なくなかったと思われる。今後も、弘前大学＝遊び場の運営といった固定的な分業に安住することなく、今回の社協のように野田村の方たち自身、また弘前市民の活動の支援に横断的に関わる機会があった方が、ボランティア（教育）の効果は高まるのではないかと考えられる。逆に、従来からの意義深い子どもの遊び場や茶話会の運営に対しても、運営自体に協力してくれる地元のパートナーと連携する時期に来ているのではないと思われる。これまでの実績をさらに飛躍させる柔軟な思考を学生自身は有していると確信されるので、それを引き出し、支えるセンターの役割が期待される。

